

庭上鶴訓

康たりきをせせて人みもあつて  
之も井のふふなるあゆ鶴 甚た



古小金井赤石の鶴冊找が赤石の風前露

も甚た下と雲あり、嘗て鶴定の也あをまも取次り

者の言ふ見せし言ひあまゆを以て毒淫とやとてし

跡の弟より見せしところ兄は甚た下と累字したる

事ありとてり一生僅百一時と鶴のみに兄の側は居りたる

評どもなまらざる角 此の鶴の鶴冊に真字ありし

余の鶴定なるは男之の言はぬ何ともみも思ひありし

ところ古小金井赤石の鶴冊を以て余が眼の暗らざりしを

証せり

昭和六年三月

天宮重徳

